

# 海外駐在員・家族および長期出張者の感染症対策

日外協 海外健康・医療センターは11月7日、第4回「海外健康・医療セミナー」を開催。ワクチン接種の進展とともに、新型コロナウイルス感染症を巡る状況が大きく変わりつつある中、留意すべきことは。



講師

国立国際医療研究センター

国際感染症センター長 大曲貴夫 氏

## 重症化率・死亡率が劇的に低下

新型コロナウイルスが未知の感染症だった2020年2月、WHOは中国へ調査チームを派遣。感染した場合の経過について次のような指針を出した。

「発症から1週間程度」——かぜ症状で、8割の患者は軽症のまま治癒

「1週間から10日後」——呼吸困難、咳・痰<sup>せき たん</sup>など、20%の症例で肺炎症状が悪化し入院

「10日目以降」——人工呼吸管理が必要になる

その後、ワクチンが開発され、ブースター接種を含む接種率向上とともに状況は劇的に変化。99%以上が軽症または無症状に。東京都のデータによると、2021年夏の第5波では、新規陽性者のうち人工呼吸が必要になる比率は1%だったが、ワクチン接種により22年夏の第7波では0.02～0.04%にまで低下。死亡率も第5波の0.41%に対して第7波では0.09%と、大きく下がっている。

**Q** 海外駐在員に事前にパルスオキシメーターを配布し、SpO<sub>2</sub>(酸素飽和度)値が95%を下回れば、すぐ受診させてきた。オミクロン株以降でも有効か。

**A** その通り。あえて注意すべきことを挙げると、オミクロン株では、のどに猛烈的な痛みが出ることもある。SpO<sub>2</sub>値には表れないが、空気の通り道をふさいでしまう可能性もあるので、医療機関での受診をお勧めする。

**Q** 基礎疾患(糖尿病、高血圧など)の治療をしている海外駐在員の赴任の可否を判断する基準は？ また、BMI(肥満度)が30以上の場合、重症化リスクはどのくらい高いのか。

**A** 基礎疾患、肥満気味といっても、コントロールが良く、ブースターを含めワクチン接種を受けていれば以前ほどのリスクにはならない。制約を緩めてよいと考える。

## 子どもたちへもワクチン接種を

70代以上の高齢者は、もともとあった持病やがんが肺炎によって悪化し亡くなるケースも多く、死亡率は依然高い。ワクチン接種に加え、感染しないための十分な注意が求められる。また、ADL(日常生活動作)低下は重症化につながりやすい。普段から体力維持に努めることが身を守ることになる。

オミクロン株以降、13歳未満の子どもの間でも感染が急拡大している。子どもだから感染しない、感染しても重症化しないなどということは決してない。子どもにもワクチン接種が必要である。

ワクチンだけでなく、治療薬も相次いで開発されている。早い段階に受診すれば必ず治ると言えるところまできている。

いざというとき、どの医療機関にかかるのかなど、受診の道筋を事前に準備しておくことが大事になる。抗原検査キットや食料品なども備